

西井龍儀

(富山考古学会副会長)

1. はじめに

常楽寺は富崎丘陵の東麓、富山市千里に位置する古刹である。平成18年の暮近く、佐伯哲也氏からこの常楽寺観音堂付近の山中に多くの石塔や塚があり、現地確認の連絡をいただいた。あいにく12月24日の案内には参加できなかったが、当日現地に臨まれた富山市埋蔵文化財センター所長藤田富士夫氏から多数の石塔類に加え、尾根筋には塚や2基の大型古墳が存在するとのことご教示を得た。かかる情報の中、本年1月6日になってようやく常楽寺観音堂跡を尋ねることができ、集積された数多くの石塔類と雛段状に造成された古墓地のひろがりを実見した。さらに藤田所長からは古墓地がさらに広範に亘ることや、常楽寺墓地にも相当数の石塔、石仏があることなどの助言を得たことから、1月13日に富山市埋蔵文化財センターの古川知明氏にも同行をお願いして再度常楽寺を訪れたのである。これによって常楽寺周辺では150点を超える石塔部品や石仏と、その石材を確認することができ、丘陵斜面に展開する多様な古墓地とかつての伽藍配置ともかかわるかと思われるいくつかの造成平坦面が遺ることも分かった。また尾根に並ぶ方形塚群も常楽寺古墓地との関連を推測しうる位置にある。以上は短時間での、かつ地表面からの観察であり、見落としやさらに広範囲に広がることも予想されるが、県内では屈指の中世石造物とその関連遺構と見られることから、ここに速報としてその概要を紹介したい。

2. 調査記録

(1)第1回調査

調査日 平成19年1月6日(土)

ア. 観音堂跡

観音堂跡の礎石上を主に石塔類が寄せてある。(正面前半側)。

石塔類は五輪塔、宝篋印塔、板石塔婆で石仏はみられない。

五輪塔、宝篋印塔はいずれも部品であり、組み合わせは不明である。

石塔の一部(主に五輪塔地輪)は向拝前面の縁石に転用されている。

石塔類の用材は安山岩と砂岩で、砂岩



観音堂跡の礎石と石塔

石造物種別		安山岩	砂岩 (粗) (微)	凝灰岩	計
五輪塔	空風輪	5	0		5
	火輪	4	3		7
	水輪	5	11		16
	地輪	0	10		10
宝篋印塔	相輪	2	0		2
	笠	0	1		1
	塔身	0	0		0
	基礎	0	0		0
板石塔婆 (方錐角柱形)		3	0		3
計		19	25		44

表1 常楽寺観音堂跡石造物集計表

が安山岩よりやや多い。砂岩は粗粒砂岩が殆どで、わずかに微粒砂岩(藪田石)がある。

観音堂跡は近年まで建物があり、移築後に石塔類がここに置かれた。

観音堂跡がある平坦面は北側背後に続く丘陵の斜面を大規模に開削造成しており、東西23m、南北46mで、その中央部後方に南面して観音堂跡がある。同一レベルで西側に現在の観音堂とその平坦面があり、東側には一段高く稲荷神社境内がある。

イ. 古墓地平坦面

観音堂跡の西側には、南向きの斜面を雛段状に開削して平坦面を造成している。

造成平坦面は東西約 40 m、南北約 45 m の範囲に 10 面以上あり、上半部は細長く、下半部は奥行が大きく幅は狭くなる。

石塔類は 3 か所に礫と混在した集積地があり、仮に上部から 1～3 とする。

3 か所の石塔類集積地は平坦面の端や隅にあり、造立当初の位置ではなく耕作など後世に集積された可能性がある。

他の石塔類も同様な見方ができるが、平坦面中央部付近で散在するものもある。

石塔類は五輪塔、宝篋印塔、板石塔婆があり、石塔の台石もしくは添石とみられる石もある。

石仏はみられない。

五輪塔はいずれも部品で、かつ小型であるが、集積地 1 の空風輪は高さ 26cm (柄含まず)、幅 22cm と大きい。微粒砂岩(藪田石)製で欠首はない。

平坦面 2-2 にある空風輪は欠首があり、小型であるがていねいな彫成で、14 世紀代とみられる。他の五輪塔は 15 世紀以降が殆どである。

板石塔婆は方錐角柱型で小型化、偏平化している。バンの種子を刻む。15 世紀から 16 世紀ごろとみられる。

石塔類の用材は安山岩と砂岩が主体で、わずかに凝灰岩が加わる。

造成平坦面 1 の東側に接して、斜面を開削した上面 2.2 m 四方ほどの集石平坦面があり、集石墓の可能性はある。ここに石塔類はない。

ウ. 丘陵尾根のゴダイ塚と方形塚群

常楽寺背後の丘陵頂部にはゴダイ塚とよばれる大型古墳と、尾根ぞいにやや下った位置に径 10 m ばかりの円墳と 5 基の塚がその東側に並ぶ。塚は一辺約 4 m の方形で高さは約 0.7 m である。このうち西側の 3 基は盗掘とみられる窪みがあり、径 10cm 前後の川原石が散在している。

ここからの出土遺物は不明だが、常楽寺古墓地に先行する集石墓、あるいは経塚の可能性があり、常楽寺古墓地の成立との関連で見直すべき遺構である。



常楽寺周辺の遺構と石造物位置図 1/5000

(2)第2回調査

調 査 日 平成 19 年 1 月 13 日 (土)
 調 査 者 西井龍儀、古川知明
 調 査 地 ア. 常楽寺墓地 (本堂裏) の石塔・石仏群
 イ. 常楽寺背後の造成平坦面
 ウ. 参道下 (南側) の古墓地平坦面
 エ. ゴダイ塚と方形塚群
 オ. 観音堂西側の古墓地平坦面

ア. 常楽寺墓地 (本堂裏) の石塔・石仏群

常楽寺本堂裏に一段高く常楽寺の墓地がある。コンクリートの基壇上に並ぶ無縫塔や五輪塔、墓塔、石仏群の北隣りで、区画された砂利敷に石塔・石仏群がある。

それぞれは、ある程度の間隔をおいて並べられ、積み重ねてあるが、その大部分は中世の五輪塔部分品で、それに宝篋印塔、一石五輪塔、板石塔婆、如来形一石一尊仏が少数と、近世以降の地藏立像が 4 体ある。またコンクリート基壇上に並ぶ石塔類の中にも、五輪塔の火輪上に宝篋印塔の相輪が重ねられたり、水輪下に宝篋印塔笠が基礎代わりに使われるなど混在している。それらを合わせた中世の石塔・石仏の総数は別表のように 52 点を数える。

このうち五輪塔、宝篋印塔の当初組み合わせがわかるものではなく、各部品の石材別最大数合計が基数の目安となろう。その見方では五輪塔は 17 基、宝篋印塔は 8 基となるが、相輪の宝珠と九輪部分が分断したものもあることから 7 基とみとく。

注目すべき石塔・石仏では安山岩製の如来形一石一尊仏と方錐角柱形の板石塔婆の一面に仏菩薩像を中肉彫したものがある。如来形一石一尊仏は簡素な彫成に見えるが顔の表情がよく表され、膝まで彫出した古様であることから 14 世紀代とみられる。これと対象的な如来形一石一尊仏がもう一体、本堂前面の保存堂内にある。石材は粗粒砂岩の岩崎石・太田石とよばれるもので、如来形坐像の表面が摩滅し、像容も不鮮明である。しかしここでは膝の表現はなく、彫りも浅い。造像時期は 15 世紀代と思われるが、県東部の如来形一石一尊仏の多くが安山岩である中で、砂岩製の如来形一石一尊仏の稀少例である。

石塔・石仏の用材石質は別表のように安山岩が 79% と多く、砂岩が約 19%、残りが凝灰岩 2% である。砂岩製の五輪塔火輪に 14 世紀代がみられるものの、安山岩製の五輪塔や宝

篋印塔などの石塔類は大部分が 15 世紀以降とみられる。1 基ある一石五輪塔は 16 世紀代であろう。

これらの石塔・石仏群の旧地は不明で、常楽寺周辺に散在していたのを寄せられたのであろう。

石造物種別		常楽寺墓地			参道下古墓地			計
		安山岩	砂 岩	凝灰岩	安山岩	砂 岩	凝灰岩	
五輪塔	空風輪	8	2	0	0	0	0	10
	火 輪	5	4	1	0	0	0	10
	水 輪	1+11	0	0	2	2	0	16
	地 輪	2	2	0	0	0	0	4
宝篋印塔	相 輪	2+5	0	0				7
	笠	3	1	0				4
	塔 身	0	0	0				0
	基 礎	0	0	0				0
一石五輪塔		1	0	0				1
板石塔婆		2	0	0				2
如来形一石一尊仏		1	1	0				2
計		41	10	1	2	2	0	56

表2 常楽寺墓地 (本堂裏、境内) 参道下 石造物集計表

イ. 常楽寺背後の造成平坦面

常楽寺本堂背後には観音堂までの間に、東向き斜面を開削した平坦面が 3 段 4 面にわたって連続する。最も東側の下段では南北約 25 m、東西約 30 m、中段が南北約 45 m、東西約 20 m、上段の現在駐車場となっている面では南北約 50 m、東西約 15 m に加え、北側

に約 30 × 10 m の平坦面がある。中でも中段には建物基壇と思われる高まりがある。ここでの礎石有無は未確認である。

さらに稲荷神社北側にも斜面を大きく挟り込んだ平坦面と、その上部に方向を変えた小平坦面もある。これらの平坦面が造成された時期や、存在した施設は不明だが、常楽寺と関わる施設の造成平坦面であろう。常楽寺本堂背後に連続する平坦面は本堂と観音堂跡を結んだ中軸線上にあり、さらにその延長には丘陵尾根の方形塚群があることも注意したい。

ウ. 参道下（南側）の古墓地平坦面

観音堂への参道階段下南側には数段の平坦面がある。このうち観音堂下の平坦面には丘陵裾に接して一辺約 4 m の方形区画が 2 面並び、その内に五輪塔水輪各 2 点と玉石が散在する。方形区画は浅い溝での区画で、高さ約 30cm と低い古墓地の区画であろう。ここから観音堂までの高さは 6 ～ 7 m はあり、観音堂西側に続く雛段状平坦面の古墓地より下位にある。これらの両古墓地が連続するか別群かは未確認だが、観音堂面より相当低い面に位置する意味は何であろうか。

エ. ゴダイ塚と方形塚群

丘陵頂部のゴダイ塚は巻尺による略測で径約 25 m、頂部平坦面径約 11.5 m、高さ約 3.5 m の円墳状である。墳頂部にある祠を建設した際に、いくらかの削平、改変を被っていると思われる。墳頂平坦面の肩に径 20cm 前後の玉石がみられるが、墳丘に伴うか別かは不明である。墳頂部の標高は 166.8 m である。

ゴダイ塚の南東約 130 m の尾根に並ぶ径約 10 m の円墳と、一辺約 4 m の方形塚群 5 基の内、西端に位置する円墳の頂部平坦面径は約 3 m で、墳丘西側斜面が大きく掘削されている。墳丘の最大高さは約 2 m である。また 5 基とした方形塚群は東側から 2 基目の南側に接してもう 1 基があるとの見方に加え、円墳も方形塚群と関連した全体で 7 基の塚とする見方もある。

オ. 観音堂西側の古墓地平坦面

前回 1 月 6 日の踏査で記録した観音堂跡西側にある雛段状の平坦面と、そこに散在する石塔群の中世古墓地の範囲に加え、さらにその西側に 3 段にわたって石塔が残る平坦面と、尾根へ続く小道をはさんで、その南西側にも前回の記録で石塔集積 3 のある平坦面 8 までの間に、細長く段状に造成した平坦面が 5 段以上存在することがわかった。

西側 3 段の平坦面を仮に上から平坦面 101、102、103 とすれば、平坦面 101 の東側に寄せ約 3 × 3.6 m の一段高い区画面があり、そこに宝篋印塔塔身と板石がある。また西側端にも約 3 × 3 m のやや高い区画面があつて、そこには石塔は見られないものの石列と板石があることから、この平坦面両端の区画はいずれも古墓地の区画と思われる。

平坦面 102 は東西に細長く、その西端近くに五輪塔火輪（砂岩）がある。

平坦面 103 は東西約 10 m、南北約 4 m で、西端隅角がよく残り、小道からまわりこんではいる道もある。石塔類は

石造物種別	集積地 1			集積地 2			集積地 3			その他平坦面			計
	安山岩	砂岩	凝灰岩	安山岩	砂岩	凝灰岩	安山岩	砂岩	凝灰岩	安山岩	砂岩	凝灰岩	
五輪塔													
空風輪	3	2(1)	0	2	3	1	2	0	1	0	1(1)	0	15
火輪	2	1	0	4	2	1	3	0	1	1	3(2)	0	18
水輪	0	0	0	0	1	0	1	1	0	2	1(1)	0	6
地輪	1	0	0	1	3	0	0	0	0	0	0	0	5
相輪	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
宝篋印塔													
笠	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
塔身	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1
基礎	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
板石塔婆	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	2(2)	0	4
計	7	3(1)	0	7	9	2	6	1	2	6	7(5)	0	50

表 3 常楽寺古墓地石造物集計表 () 内は微粒砂岩内数

石質	観音堂跡	古墓地平坦面	常楽寺墓地	参道下古墓地	計
安山岩	19	26	41	2	88
砂岩	25(1)	20(5)	10	2	57(6)
凝灰岩	0	4	1	0	5
計	44(1)	50(5)	52	4	150

表 4 常楽寺石造物の石質割合 () 内は微粒砂岩内数

未確認である。

小道の南西側に広がる5段以上の平坦面は全ての面を踏査できず、その規模、範囲は未確認だが、上から2段目平坦面に2基の五輪塔陽刻板石塔婆（微粒砂岩）があり、これらの平坦面下方の石塔集積3の在り方からみて、それぞれの平坦面も古墓地の造成平坦面と思われる。

また観音堂背後の南西側崖上でも五輪塔水輪（砂岩）がある。

3. 調査所見

常楽寺本堂と観音堂（観音堂跡）の間には大規模な造成平坦面が連続し、常楽寺と関わる計画的な施設配置の平坦面とみられる。

常楽寺観音堂の西側には斜面を雛段状に細長く造成した平坦面が連続する。そこに五輪塔や宝篋印塔、板石塔婆などの石塔類が散在し方形区画や集石もある。さらに観音堂より下段の平坦面にも方形区画がありそこにも五輪塔があることなどから、これらはいずれも常楽寺の広大な中世古墓地であろうと思われる。



常楽寺本堂背後の平坦面（下段）

古墓地に散在し、あるいは集積された石塔類、さらには観音堂跡や本堂裏に安置されている石塔・石仏類の総数は150点にもなる。これらの殆どが原位置から移動し、その大部分は五輪塔の各部品であり、宝篋印塔も部品で、組み合わせのわかるものはないが、これだけ多数の石塔類をもつ古墓地は県内では稀で、氷見市上日寺中世墓と並ぶ最大規模と評価されよう。

石塔・石仏類の特徴から一部に14世紀代の五輪塔や如来形一石一尊仏がみられるものの、大部分は15世紀代以降で、16世紀代の五輪塔や一石五輪塔もある。それらの用材は安山岩と砂岩に代表されるが、安山岩が全体の6割近くを占める反面、14-15世紀代で古様の五輪塔には砂岩が多いように思われる。砂岩はいずれも石灰質で粗粒砂岩（岩崎石・太田石）と微粒砂岩（藪田石）があり、いずれも県西部の石材である。粗粒砂岩の石塔、石仏は県西部のみならず東部でも各地での最古段階に大型品で使われているが常楽寺の石塔群には大型品は見当たらない。

常楽寺背後の尾根筋に並ぶ方形塚群は一辺約4mで、盛土上に集石もあることから、これらは集石をもつ古墓地あるいは経塚の可能性がある。さらにこの方形塚群の西端に並ぶ径10mの古墳も経塚とみなし、方形塚群をそれに後続する古墓地とする見方もあろう。いずれにせよ尾根筋の方形塚群は斜面に展開する古墓地に先行する常楽寺と関わる遺構であろう。

常楽寺には国指定重要文化財の木像十一面観音立像と聖観音立像があり、いずれも平安時代の造像である。このうち聖観音立像は牛獄の宿坊から当地へ移されたとの伝承をもつ。常楽寺境内では古代の遺構、遺物は未確認だが、以上のような古い仏像を擁する古刹であり、今回調査の造成平坦面や石塔・石仏群はその一端を垣間見たにすぎない。造成平坦面や古墓地は杉林や雑木林となっており、地形や植生の急変はないように見受けられるが、今後は計画的な調査と保存活用の取り組みが望まれる。

なお、今回の調査は常楽寺周辺や牛獄山中まで、広範囲を長年にわたって調査されてきた佐伯哲也氏のご教示がその端緒である。佐伯氏の調査姿勢とその成果を評価し、今回の調査機会を得たことに感謝申し上げたい。